



来賓祝辞

永久 寿夫 様

公益財団法人松下幸之助記念志財団 評議員

株式会社 PHP 研究所の元取締役・専務執行役員

ご紹介いただきました永久でございます。薄井さん、須藤さん、波田さん。4年間の研修お疲れさまでございました。コロナで思うように研修ができなかったのではなかったかと思います。審査員をやっておりませんので、研修の内容がどうだったかよく分かりませんが、きっと素晴らしい成績で研修を終えられたことと思います。ご卒塾おめでとうございます。

私事になりますが、私も同じ松下幸之助が創った PHP 研究所を去年の末に卒業いたしました。4年ではなく40年の「研修」でございました。

PHPではこちらの塾主を創設者と呼んでおります。その創設者に直接話をして握手までしたというのは、いまここにいらっしゃるPHP研究所の会長でもある松下理事長は別としまして、私が最後の一人でした。いくつか深い思い出がありますが、今日はそれを少しお話して、卒塾される皆さんへの鼻向けにしたいと思います。

1986年の4月のことと記憶しています。お亡くなりになる3年前です。私がアメリカに留学をさせてもらうときに、松下記念病院へご挨拶に行き、何階だったか忘れてしまいましたが、たしか一番上だったと思います。松下創設者はベッドに横たわっていらっしゃいました。私がいろいろ話をした最後に、細くて白い手をベッドから挙げて私の手を握り、ほんとうは挙げられた手を私が握ったのですが、そこで「大変かもしれへんけど、がんばってな」とお声を掛けてくださったのです。とても感動しました。それから留学先でも仕事でも、辛くしんどいことが沢山ありましたけれども、その言葉を支えにして40年間やってきました。心の中でとても強く残っている思い出です。

その前にも何度かお会いすることがありました。1983年4月から、PHP研究所は「世界を考える京都座会」という提言機構を始めました。座長は松下幸之助です。座会のメンバーは錚々たるもので、すごかったですね。通産省の審議官で天谷直弘先生、名古屋大学の経済学者・飯田経夫先生、東京大学の科学技術の専門・石井威望先生、ウシオ電機の牛尾会長、慶応大学の経済学者・加藤寛先生、京都大学の国際政治学者・高坂正堯先生、立教大学の経済学者・齋藤精一郎先生、作家の堺屋太一先生、京都大学の数学者・広中平祐先生、作家の山本七平先生、上智大学の渡部昇一先生、物凄いメンバーだと思います。

たしか最初のころは、1か月に1回でしたかね。メンバーの皆さんが京都の研究所まで来られて、松下創設者もほぼ毎回いらっしゃっていました。僕はその事務局の一番下っ端で、資料を整理したり、連絡係やお迎え係です。会議前にはトイレをピカピカにしたり、雪の降った日は雪かきもしました。「新潟生まれだから、得意だろ」とか言われて。まあ、丁稚の仕事をしていたわけです。

創設者は車椅子でやってこられて、最初に開会の挨拶をする。か細い声なのでよく聞き取れないから、当時の上司が「通訳」をして言い直します。そのあとに議論が始まるのですが、創設者はそんななかでコックリコックリされるんですね。まあ、そのころはもう90歳近いわけで、仕方ないといえばそのとおりののですが、メンバーを集めた座長がそうした状況というのは客観的にみますとかなり失礼なわけです。ですが、メンバーの方々は本当に真剣に議論されていくんですね。それで創設者は議論が終わるところになると目を覚まされて、最後のご挨拶をされるというような、そんな状況でした。

当時超一流の専門家、経営者たちが、どうして居眠りをする座長のもとに集まってきて、世の中をよくしていこうとあんなに真剣に議論するのか、ある意味不思議でした。これは松下さんがもちろん日本を代表する経営者であったということがあったかもしれません。けれど、ソニーの盛田さんも海外の雑誌に紹介されていたし、このあいだお亡くなりになった石原慎太郎さんと共著で『Noと言える日本』を書いて世界的な反響を呼んでいるわけです。大正製薬の上原さんも長者番付の常連で、のちに参議院議員になり、科学技術庁長官なども務めていますね。日本をよくしたいと活躍した経営者は松下さんの他にもたくさんいたのです。なぜ松下創設者のところにこうした人たちが集まってきたかという、私は思うのですが、それは思いの強さだと思うんです。世の中をよくしていきたいという、その思いのエネルギーの量だと思うんです。

終戦後すぐですよ。「日本をよくしていきたい。世界をよくしていきたい、繁栄と幸福の社会をつくりたい」とずっとずっと思い描いている。それを本や雑誌に書き続けてきた。あるいは様々な場所で講演をしてそれを訴えてきたわけです。さらに、それを実現するためにPHP研究所を創り、実践者となるリーダーを育てるために松下政経塾を創ったわけです。この思いの強さ、熱量というのはとんでもないものだと思います。松下幸之助という人が極めて大きな存在である理由は、この熱意の強さによるものだと思います。PHP研究所も松下政経塾もこの熱意に共感する人たちに支えられて、ここまで発展してきたのです。

「日に新た」という言葉があります。みなさんもお存知かと思いますが、世の中は変わっていきますから、目的は同じでも、状況に合わせて手段は変えていかなければなりません。ですから、松下幸之助の言葉を一言一句なぞってそれを実現していかなければならないということではないと思います。別の言い方をすれば、私達が継承していかなければならないのは、松下幸之助の世の中に対する思いとその強さだと思います。それがなければ世の中はよくは変わらない。これはPHP研究所という会社もそうです。それを忘れてしまえばただの出版社になってしまうだろうし、松下政経塾もそれが無くなってしまえばただの政治家や社会的企業家の養成塾になってしまうだろうと思います。

3年前になりますかね。1期生の野田元総理が40周年式典での挨拶で、「私は松下幸之助さんに言われたことを何一つ実現できていない。忸怩たる思いである」というお話をされました。総理をやられた方ですよ。その人が何もできていないと声を詰まらせて言う。それだけ強い忸怩たる思いを持っていたわけです。感動いたしました。私達もがんばらなければならぬと思いました。元総理の方がそういう思いになるわけですから、他のみなさん我々もその強い思いを背負っていかなければならないなど

思います。

今日、卒塾するみなさんは、それぞれ異なる道を歩まれるのだと思います。そのなかで、松下幸之助の思いを、その思いの重さを引継いでこれから歩いて欲しいなと思います。私も 40 年の PHP 研究所での「研修」を終えて、いまは無職ですけれども、4 月から名古屋商科大学の教授の職を得て、公共政策などを教えることになります。

皆さんと一緒にスタートラインに立って、松下幸之助の思いを背負ってやっていきたいと思います。これからも一緒にがんばっていきましょう。ご卒塾おめでとうございます。

